

「財布を盗られた」などを感じる。	
事情を聴く	<input type="checkbox"/> 「どういことが事情を聞かせて」などと伝えて、本人の訴えをよく聞く。 POINT! 話を聞くと、本人の気持ちが落ち着いてきます。また、本人がどのように考えているのかを知ることでもできるので、原因や対応を考える際のヒントにもなります。
とにかく一緒に探す	<input type="checkbox"/> 「どこに置いておいたの？」などと尋ねておいておいたところを見に行く。 <input type="checkbox"/> 「バックの中にはないの？」などと尋ね、バックを確認する。 POINT! 盗られたことを否定すると感情が高ぶり、その後のかかわりが難しくなる場合があります。家族が盗ったと主張されるときは、別の家族が探します。
お金の不安を聞き一緒に対応する	<input type="checkbox"/> 落ち着いている時にお金の不安を聞き、不安を払しょくするようにする。 POINT! 財布を盗られたという時などは、背景にお金に関する不安がある場合があります。将来も安心して生活できるとか、少しでも自分でお金を管理できるなどにより、経済的不安感が軽減できるでしょう。
一旦外にでる	<input type="checkbox"/> 「わかった。後でしっかり探そう。そろそろ〇〇があるんだけど、一緒に来てくれない？」などと誘う。 POINT! 本人の不安が募りエスカレートするような場合は、一旦忘れてもらえるよう本人が気になる用事などを理由にして一旦その場を離れるという方法もあります。

笑顔で過ごしたい 認知症の人と家族のための暮らし方のヒント



⑰ 本人が疑いを感じる時は？

こんな場面ありませんか？
 本人が、
 ・困らせている人がいると感じている
 ・自分の物が盗まれたと感じている



この冊子では、現場での実践や支援の知を参考に認知症の人と家族がとともに暮らすときのヒントをまとめています。

- 順番に読む必要はありません。気になるところから使えます。
- すべてを行う必要はありません。合うものだけ選べます。
- うまくいかないときは、やり方を変えても大丈夫です



ポイント

- 家族が犯人と疑われる場合に、最も身近で本人の介護をしている家族が犯人になりがちです。そのため、家族が犯人と疑われる場合は、家族の負担も大きくなります。専門医の受診の際に、犯人にされてまっている家族もカウンセリングを受けれるようにする等の対応も必要でしょう。犯人にされている家族の逃げ場も作れるようにしたり、本人が「盗られた」と繰り返すことで、親戚等に誤解が生じないような配慮も必要な場合があります。
- 別冊子「ものを置き忘れる人には？」もご参照ください。

本冊子は、国立研究法人「医療研究開発機構（AMED）」の認知症開発研究費「血液バイオマーカーと神経画像検査によるBPSDの生物学的基盤の解明、および認知症者の層別化に基づいたBPSDケア・介入手法の開発研究」の分担研究「BPSDケアレジ研究とJ-BIRD-PNBにおける非生物学的収集項目決定と質管理」の成果物として作成しました。
 本冊子の作成にあたっては、認知症介護研究・研修仙台センター開発「初めての認知症介護」の構成を参考にしました。

Q. どうして被害を受けたと思ってしまうの？



A1. もの忘れの自覚がないため

もの忘れは、最近体験した出来事を忘れるという特徴があります。加えて最近の出来事を忘れたという自覚が持てないことがあります。結果、例えば、転んだことがあるので家族が心配して止めようとする「家族が風呂に入るのを阻止する」とか、財布を置き忘れたのをわからず、「誰かが盗った」などといった誤解が生じ、それが疑いに発展します。

試してみたいこと

1. 何が原因か、誰かと考えてみる

原因が分かれば対応が検討できる場合があります。専門職と原因について考えてみるとどう対応すればいいか見えてくる場合があります。例えば、「盗られたと思う人は、経済状態が不安」など、被害を受けたと思ってしまう背景に不安があり、安心したいという気持ちになっている場合もあります。

2. 専門職に頼る

本人が困った妄想をしているときには、家族としても対応が難しいでしょう。そういったときは抱え込まず、ケアマネジャーやホームヘルパーなど専門職に相談しましょう。介護サービスを使っていない時は、まず近くの地域包括支援センターに連絡してみてください。

A2. 判断力が低下がしているため

疑いを感じてしまうのは判断力の低下が影響している場合があります。そのようなとき本人の希望と現実のずれが生じると疑いに発展します。例えば、お風呂に入りたいのに止められるとか、ご本人は一度にたくさんの食品を買いたいが、傷むので家族は少量ずつ買いたいか、そういった本人の希望とずれたことが起こると、本人は困らせる人があるといった考えに発展したりするかもしれません。

試してみたいこと

本人と話して嫌なことやこだわっていることを知る

本人をよく知ることで、希望に沿わない対応が減れば、困らせるを受けたと思うきっかけがなくなり、疑いが減少する可能性があります。本人に興味を持ち、こだわっていることを詳しく尋ねたり、普段からよくコミュニケーションをとることでヒントが得られるでしょう。好きなことをしてもらってほめる（例えば料理を作ってもらって、料理をほめる）などをしていくことで、関係が改善すると疑いは少なくなることがあります。

おすすめしない対応



■頭ごなしに否定すると、訂正できず、感情のぶつけ合いになってしまう場合があります。

試してみたいこと

私がお風呂に入るのを家族が阻止するなどという。(被害的な妄想がある)

専門職に相談する	<input type="checkbox"/> 専門職となぜそのような考えが浮かんでくるか、原因を話し合う。 <input type="checkbox"/> 専門職とどう対応すればいいか考える。 <p>POINT! 専門職と一緒に考えると、対応の方向性が見えることがあります。例えばこの例では、本人が風呂に入ろうとしたときに転倒したことがきっかけで家族が本人に「一人で風呂に行かないで」と伝えていたことが原因の一つになっていました。専門職に相談すると、転倒しにくい環境づくりやケアについて教えてもらえ、家族も強く声かけせずに済むようになりました。</p>
介護保険サービスを使う	<input type="checkbox"/> ケアマネジャーに相談し、お風呂はデイサービスで入るようにする。 <p>POINT! 家族の負担が大きい時は、無理せず介護保険サービスの利用を検討してみるのも有効です。</p>
話をずらし、好きな話に持って行く。	<input type="checkbox"/> 本人の好きな孫娘の話をする。「お風呂はいつ入るようにする?」「夕食はみのり(孫娘の名前)と入る?」「みのりはピアノ習い始めたよ」など誘導する) <p>POINT! 介護に慣れてきた人向けの対応です。被害的な妄想が繰り返されるときは、本人の好きなことを知っておき、そちらに誘導します。事前にどう誘導するか考えておきます。</p>



ワンポイント

例えば、サービスを導入を検討すると「私が邪魔になるんでしょう」と本人から言われたりします。本人としては、見放された感があり、家族との関係をもっと求めていると考えられます。一方で家族としても、働かないといけないなど、事情があります。サービス導入に際しては、例えば、本人が料理が好きなら、「普段は仕事でいけないから、ヘルパーさんに来てもらうけど、月に1回は一緒に料理するようにしよう」と家族から提案するなど、関係の持ち方を話し合うことで本人が納得できる場合があります。